

## 龔自珍論(一)

——戒詩を中心として

中村嘉弘

一 清末、嘉慶・道光年間アヘン戦争前夜に活躍した詩人たちの第一に数えられるべき者は龔自珍である。龔自珍は古典文学の世界と近代文学の世界の接点に位置する。その家柄や環境はなお近代以前の読書人のものであるが、異常までの憂愁の深さとそれに対する深刻な省察などは、すでに古典文学の範疇をはるかに超えていると思われる。

龔自珍の出身は、浙江省杭州の書香門第、読書人の家庭である。祖父の敬身は乾隆三十四年(一七六九)の進士で、礼部・吏部の官を歴任して雲南迤南兵備道にいたった。父の麗正もまた嘉慶元年(一七九六)に進士となり、官は江南蘇松太兵備道、江蘇按察使にいたり、「国語注補」などの著もある学者でもあった。母段馴は清朝考証学の泰斗である段玉裁の女であり、みずからの詩集を持つ女性であった。また自珍二十一歳のときの初めの妻段貞美は段玉

裁の孫であった。

龔自珍の生涯は、大きく分ければ四期に分けることができよう。第一期は幼少年時代。第二期は順天鄉試に応じた十九歳から二十七歳の浙江鄉試合格まで、勉学と応試、詩詞の創作と経国濟世の著述の時代である。第三期は二十八歳以後、四十七歳まで、時弊に対する憂国の発言、官界での保守派との摩擦、度重なる会試不合格と不遇の時代。公羊学を学び仏教信仰に入り、詩には深い憂愁がある。第四期は四十八歳から五十歳まで、退官して帰郷し死にいたるまでの三年間。長く詩作を離れていた自珍が、沈黙を破り生涯の総決算たる「己亥雜詩」三百十五首を詠んだ時期である。

自珍の生きた嘉慶・道光の時代、アヘン戦争前の数十は、やがて来る太平天国の乱の幕開けの時代、巨大な清王朝が崩壊への急坂を滑り落ちて行く時代であった。嘉慶元

年に起つた白蓮教の乱は、四川・甘肅・陝西・湖北・河南におよび、その収束には十年に近い歳月を必要とした。また、嘉慶十八年には天理教の乱が起つてゐる。乱は直隸・河南・山東におよび、賊徒が紫禁城に乱入するという衝撃的な禁門の変が起つてゐる。対外問題では、アヘンの輸入を手段として、英国の中国への野心がますます露骨になつていく時代であつた。アヘン輸入問題は当時最も緊急な問題であり、繰り返し禁止令が出されたにもかかわらず、輸入は増大し、アヘン吸飲による人心の荒廃と銀の流出による経済の混乱を招いた。林則徐が欽差大臣として広東に派遣され、英国商人のアヘンを大量に没収焼却したのは道光十九年己亥（一八三九）、自珍四十八歳のときのことであり、アヘン戦争が始つたのはその翌年、自珍の急逝の前年のことであつた。

自珍は、嘉慶・道光に先立つ乾隆の時代について「我心靈の鬼神を動かす有るも、却つて乾隆の春を見るの福無し」（「秋夜 俞秋圃が琵琶を弾ずるを聴きて詩を賦す」とうたい、この時代を「衰世」（「乙丙之際箴議第九」）と認識し、現状に対する変革を希求したのであるが、それらは冷淡な無視と不遇によつてむくわれた。しかし自珍の詩はその憂国の情の激しさ深さにおいて、後の詩人・革命

家たちに大きな影響を与えた。最も人口に膾炙するのは、「己亥雜詩」その百二十五の次の詩であらう。

九州生氣恃風雷 九州の生氣 風雷を恃む  
萬馬齊瘖究可哀 萬馬 齊しく瘖す 究に哀しむ可し  
我勸天公重抖擻 我は勸む 天公重ねて抖擻し  
不拘一格降人材 一格に拘らず 人材を降さんことを

自珍は生涯を通して憂国の人であつた。詩人として、国を憂へ変革を希求する詩や、社会批判の詩を作つた。少しく名をあげれば、「行路易」「鄰兒半夜哭」「小遊仙詞十五首」「餽鮑謠」「詠史」「偽鼎行」などがその一部である。しかし、それらの作品からだけでは自珍の全体を理解することはできない。詩人としての自珍の特異さは、その深い憂愁にあるけれども、それが単に憂国の情に出るもの、あるいは身世の不遇に発するものごとく割り切ることとはできない。自珍は憂愁が自己の存在の根源に発動すると認識した。古来、憂愁をうたう詩人は無数にあるが、憂愁の由来をたずねて精神の内奥を深く省察した詩人は、恐らく自珍が初めてではあるまいか。さらにまた、憂愁を断ち切るために仏教に近づいた詩人は少くないが、憂愁を断ち切るために仏教信仰に入り、詩の創作を断つという「戒詩」にまでいたつた詩人は、龔自珍のみであらう。これもまたき

わめて特異な現象だといわざるを得ない。これらの問題の考察は、詩人としての自珍を把握するのに欠くことのできないことだと思われる。

## 二

自珍が幼時からきわめて敏感な神経を持っていたことは、かれ自身が後年語るところのエピソードによって、よく知られている。内閣中書として、北京の国史館で「大清一統志」の重修の任にあった三十歳のときの「冬日小しく病み家書を寄せて作る」の詩に次のごとくうたっている。

黃日半窗煖 黃日 窓に半ばにして煖かく

人声四面希 人声 四面に希なり

錫簫咽窮巷 錫簫 窮巷に咽び

沈沈止復吹 沈沈として止み復た吹く

小時聞此声 小時 此の声を聞けば

心神輒為癡 心神 輒ち為に癡たり

慈母知我病 慈母 我が病を知り

手以棉覆之 手ずから棉を以て之を覆う

夜夢猶呻寒 夜夢みて猶お呻寒し

投於母中懷 母の中懷に投ず

行年迨壯盛 行年 壯盛に迨び

此病恒相隨 此の病 恒に相い隨う

飲我慈母恩 我が慈母の恩を飲まんとするは

雖壯同兒時 壯と雖も兒たりし時に同じ

今年遠離別 今年 遠く離別し

独坐天之涯 独り天の涯に坐す

神理日不足 神理 日に足らず

禅悅詎可期 禅悦 詎ぞ期す可けんや

沈沈復悄悄 沈沈 復た悄悄

擁衾思投誰 衾を擁して誰に投ぜんかと思ふ

この詩の後記には「予 毎に斜日中の簫声を聞けば、則ち病む。其の故を喻る莫し。此に附記す」という。夕陽の中であめ売りのチャルメラの声を聞くと、心神は呆け、夜も夢でうなされた幼時の体験が、遠く郷里に別れて暮す母への甘美な思慕の中にうたわれている。こうした幼時の追憶を持つ人は決して少くはないと思われるが、自珍の場合、「行年 壯盛に迨び、此の病 恒に相い隨う」といい、この神経の病が幼時にとどまらず、壮年におよんでもおさまらず、「神理 日に足らず、禅悦 詎ぞ期す可けんや」、精神も充実せず、禅定の悦び、精神の安定も期待できない心は重苦しくひそやかに、夜具をかぶっていったい誰の胸に身を投げようかというのである。病的な精神状態は三十歳を過ぎてもお常に詩人を苦しめており、病める過敏な

神経はかれの憂愁と深くかわっていることを推測させるのである。

詩人の精神はきわめて早熟でもあった。二十九歳の作「因憶兩首」その一には

因憶横街宅 因りて憶う 横街の宅

槐花五丈青 槐花 五丈 青し

文章酸辣早 文章 酸辣なること早く

知覚鬼神靈 知覚 鬼神 靈あり

といい、みずから「年十三、横街の宅に住む、嚴江宋先生、其の文を評して曰く、行間酸辣なり」と注する。

「酸辣」の語は、十三歳、北京の横街に住んでいたとき、塾師であつた宋璠（魯珍）の評であるが、自珍の文章の裏

にひそむ悲哀の情を指摘したものでなからうか。また

「知覚弁一首を作る、是れ文集の託始なり」と注しているが、これは「弁知覚」の一篇をさしている。「弁知覚」は、

宋璠が「孟子・萬章下」にみえる伊尹の「天の此の民を生ずるや、先知をして後知を覚らしめ、先覚をして後覚を覚

らしむ」の語について、「知」と「覚」との別を問うたの

に対してそれを弁じた文章である。「鬼神 靈あり」というのは、みずからの創作において、精神の活動が靈妙であつたことをいうものである。自珍が年少にしてすでに創作

における靈妙な精神の活動を自覚していたことを、この句は示している。

また「因憶兩首」その二では、情緒の面でも早熟であつたことをうたっている。

因憶斜街宅 因りて憶う 斜街の宅

情苗苗一絲 情苗 一絲 苗ゆ

銀缸吟小別 銀缸 小別を吟じ

書本画相思 書本 相思を画く

自注によれば、八歳、北京の斜街に住んでいたときのことである。幼い恋が芽生え、銀の火ざらのもとで、ちよつ

とした別れを詩によんだり、帳面に恋するひとの姿を描いたりもしたというのである。

幼い恋については、また別に「百字令 袁大琴南に投ず」（「懷人館詞選」）の中にもえる。

放学花前 放学 花の前

題詩石上 詩を題す 石の上

春水園亭裏 春水 園亭の裏

逢君一笑 君が一笑に逢う

人間無此歡喜 人間 此の歡喜なし

この詞には「乃ち十二歳の時の情事なり」と自注がある。早熟な精神は、早くから夢想的傾向をも示している。

「弁知覚」と同じ十三歳のときに宋魯珍の命によって作られた「水僊華賦」には夢幻的情緒というべきものが表われている。その一部をあげてみよう。

一仙子有り 其の居は何処ぞ。是れ幻にして真に非ず  
水涯に降る。韞翠を裾と爲し、天然の粧束なり、黄を將  
つて額を染め、鉛華を事とせず。……花態は瓏鬆、花心  
は旖旎たり。一枝沐を出でて、俊拔双び無く、半面粧を  
凝らして、容華第幾ぞ。明豔を弄して其れ仙ならんと欲  
し、澹情を流水に写す。……香は暮渚に霏たり、水雲何  
ぞ清愁を限らん、冰は晨洲に泮け、環珮 一声 幽韻な  
り。……

この最も早い時期に作られた賦には、かれの詩人としての素質が、いかようなものであるかが、すでに示されていると思われるのである。

### 三

ここで青年時代の自珍の経歴に、ごく簡単にふれておこう。自珍は、十九歳で順天郷試副榜に合格し、二十一歳のとき、武英殿校録に充てられた。この年、徽州知府に任ぜられた父に侍行して徽州へ行く。蘇州で段貞美と結婚したが、妻は翌年病死している。二十四歳のとき、父が蘇松太兵備道に任ぜられた。二度目の妻何吉雲と結婚したのはこ

の年である。二十五歳のとき、父の任地上海へ行き、そこに留る。そして二十七歳のとき、浙江郷試に合格し挙人となったのである。十九歳以降は本格的な創作が始った時代である。

龔自珍の詩の編年は、十五歳のときに始まり四十七歳に終る。「己亥雜詩」その六十五の自注に「詩の編年は嘉慶丙寅に始り、道光戊戌に終る、勅して二十七巻と成す」という。早い時期の詩は失われ、現在残されているのは二十八歳以降の編年詩および「己亥雜詩」である。

「倚声填詞」すなわち詞の創作は、十九歳のときに始る。「己亥雜詩」その七十五の自注に「年十九、倚声填詞を始め、壬午の歲勅して六巻と成す、今頗る之を存することとを悔ゆ」という。現在その作品百五十余首が残されている。自珍は詞の創作においてすぐれた才能を示した。外祖父段玉裁は自珍の才を非常に喜んでおり、とりわけ詞については、

其の懷人館詞と曰う者三巻、其の紅禪詞と曰う者又二巻、造意造言、幾んど韓李の文章に於けるが如く、銀盆雪を盛り、明月 鷺を蔵し、中に異境有り。此の事 東塗西抹する者多きも、此に至る者少し。自珍弱冠を以て之を能くす、則ち其の才の絶異なると、其の性情の沈逸

なると、居ながらにして知るべきなり。(「懷人館詞序」)と絶賛している。しかしまた段玉裁は、詞が情の文学であるがゆえに、詞創作による情への沈湎は、政治の世界における活動の前提となる経史の学問にとって決して益となるものでなく、「愈よ工なれば、道を去ること愈よ遠く」、むしろ害になるものであると戒めている。段玉裁は前文に続けて、

余少き時詞を為るを慕うも、詞は自珍の工なるに逮ばず。先君子之を誨えて曰く、是れ経史を治むるの性情に害有り、之を為ること愈よ工なれば、道を去ること愈よ遠しと。予謹んで教を受け、輟めて為る勿し。

といい、「自珍の詞を愛するや、其の自珍を愛するに如かざる」がゆえに、自珍が詞の創作によって深く情に沈湎することを心配しているのである。

段玉裁は翌年に外孫自珍に対して、勉学を励ます書簡を送っている。七十九歳の大学者段玉裁の二十二歳の外孫に対する期待は、なみなみならぬものがあつたのであろう。自珍二十三歳のときに書かれた四篇の「明良論」は段玉裁をいたく感動させ、「髦いて、猶お此の才を見て死す、吾恨みず」といわしめている。「明良論」以後、嘉慶二十年乙亥(自珍二十四歳)から二十一年丙子にかけて書かれた

「乙丙之際箸議」(第一・三・六・七・九・十六・十七・十八・十九・二十・二十五の十一篇が残されている)、その他「平均篇」「尊隱」など、時弊を鋭くつき変革を希求する重要な文章がつぎつぎと書かれた。これらはいずれもこの時代を「衰世」とし、「乱も亦竟に遠からざらん」(「乙丹之際箸議」第九)とする立場から書かれた譬世の書であつた。

#### 四

自珍は二十七歳のとき、浙江郷試に合格し挙人となつた。翌二十八歳のとき、上京して会試に応じたが失敗、そのまま北京に留つた。北京は自珍が幼時より住み馴れたところであつた。これ以後、四十八歳のとき官を辞して帰郷するまで、二十九歳から三十歳にかけての帰郷、また、母の喪に服するため三十二歳から足かけ三年の離京を除けば、ほとんど北京で生活する。

二十八歳以後、自珍は二度の恩科を入れて六たび会試に応じ、六度目、三十八歳のときによりやく会試に合格した。第一回の会試失敗以来十一年目のことであり、十九歳の郷試から数えれば二十年の歳月を経ている。この間、官は二十九歳のときに得た内閣中書の微官(従七品)にとどまる。まことに長い不遇といわねばならない。

この時期、特筆すべきことは、公羊学を修めたことと仏教を学び信仰に入っていたこととである。

自珍は二十八歳のとき、公羊学者劉逢祿（字は申受）について公羊学をおさめた。その時のことを「雜詩、己卯、春より夏に徂び、京師に在りて作る、十有四首を得」のその六、「劉申受に就いて、公羊家の言を問う」と自注のある詩は次のようにうたっている。

昨日相逢劉礼部 昨日 相逢う 劉礼部

高言大句快無加 高言大句 快 加うる無し

從君燒尽虫魚学 君に従いて燒尽せん 虫魚の学

甘作東京売餅家 甘んじて作らん 東京の売餅家

劉逢祿の「快 加うる無き高言大句」は、自珍の憂國の情を激しく揺り動かし、「虫魚の学」すなわち些細な問題を穿鑿する訓詁の学を燒き尽し、「東京の売餅家」になろうといわしめている。「東京の売餅家」は魏の鍾繇が公羊を好まず左氏を好み、左氏を「太官」といい公羊を「売餅家」といったという故事にもとづく。

自珍は十二歳のとき外祖父段玉裁から「説文解字」を学んでいるが、文字の学は「袁世」を救うものではないと考えたのである。これ以後の自珍の著述は、公羊学にもとづくものが多いのである。自珍の変革への希求が、公羊学者

劉逢祿によって明確な方向づけがなされたということができよう。

しかし一方では、仏教に急速に接近する。自珍の仏教信仰は「齊天樂」の序に「幼にして転輪を信じ、長く大乘を窺う」というごとく幼時に始まるが、このころ経世済民の信念が政治の世界に入れられず、憂愁は深まり、ついに救いを信仰に求めるようになったのであろう。「雜詩、己卯、春より夏に徂び、京師に在りて作る、十有四首を得」その十二に次のようにうたう

樓閣參差未上燈 樓閣參差として 未だ上燈せず

孤芦深处有人行 孤芦深き処 人の行く有り

憑君且莫登高望 君に憑まん 且らく高きに登りて望む

こと莫れ

忽忽中原暮靄生 忽忽として中原に暮靄生ず

詩には「陶然亭の壁に題す」と自注がある。高く低く重なり合う樓閣にはまた火がともらず、まこもや葦の深く茂るところ、なお歩く人がいる。まずとにかく高い所に登って眺めるのはよしたまえ、心が晴れるどころ悲しみをかきたてるだけだから。中原の地には暮れのもやがすでに立ちこめているだけだ。「忽忽として中原に暮靄生ず」は、「乾隆の春」もとくに過ぎ、いまや日に日に衰亡に向いつつあ

るたそがれの清朝を寓するものである。「衰世」の認識が詩に表現され深い憂愁がこもる作である。またその十三には

東抹西塗迫半生 東抹西塗 半生に迫る

中年何故避声名 中年 何の故か声名を避く

才流百輩無餐飯 才流百輩 餐飯無し

忽動慈悲不與爭 忽ち慈悲を動かして与に争わず

あつちを消しこつちを消しこつちを塗り、添削推敲してすでに半生になろうとしている。それなのに今になってなぜ名を避けようとするのか。才能のある者たちが食う物もないのを見ると、ふと慈愛の心が動いて争そうまいと思う。この詩は、文学上の名をも避け、官界での競争をも慈悲の心から放棄して、しだいに信仰の世界へ入ろうとしていることを示している。さらにその十四は、次のようにうたう。

欲為平易近人詩 平易にして人に近き詩を為らんと欲す

るも

下筆清深不自持 筆を下せば清深 自から持せず

洗尽狂名消尽想 狂名を洗い尽して想を消し尽さん

本無一字是吾師 本と一字無きは是れ吾が師

平易にして人の情に近い詩を作りたいと思うのだが、筆

を下せば悲哀の情が湧き上り抑制することができない。いっそのこと「狂」という評判を洗い尽し、心中の想念をも消し尽そうと思う。もともと文字のないことをわたしの範とするとこなのだ。「本無一字是吾師」は、他の解釈の

可能性も否定できないのであるが、蘇軾の「人生 字を識るは憂患の始め」（『石蒼舒醉墨堂』詩）をふまえ、仏教の信仰の世界へ入ることを意味しているのではないだろうか。経世済民の信念を通そうとする「狂」なる生き方を棄て、想念をも消し尽し、憂患を生み出す文字の世界を脱けてこそ、憂患は消え失せるというのである。この解釈が成り立つとすれば、この詩は翌年に始まる戒詩の前ふれだとする事ができよう。「狂」なる生き方を棄て、想念をも消し尽そうとするとき、変革者としての自珍も詩人としての自珍も消滅し、残るのは信仰者としての自珍のみということになる。この詩には、国家の危急を直視せず、表面的な太平の世に安住する当路の者に対する深い絶望と、憂愁からの脱出、仏教信仰への志向があると思うのである。自珍の仏教信仰は、翌年二十九歳春の詩に明確に現われている。「馱鼓」三首その三にいう

書来懇款見君賢 書来ること懇款 君の賢を見る

我欲取狂漸向禅 我は狂を収め漸く禅に向わんと欲す



(中略)

一卷金経香一炷 一卷の金経 香一炷

儼君自儼法無辺 君を儼せしめ自から儼せば法無辺

詩中の「君」は、当時父母のもとにいた妻の何吉雲をさす。

自珍はこの年再び会試に下第し、挙人をもって内閣中書を得た。この年の編年詩を見ると、下第後郷里に帰り、翌年に上京している。<sup>(9)</sup> 自珍が本格的に仏教を学び始めるのはこの時期である。自珍が仏教を最初に学んだ師、「第一の導師」<sup>(10)</sup>は、江沅である。江沅、字は子蘭、又の字は鉄君、江蘇吳県の人。江声の孫であり、段玉裁の門に学んだ文字学者である。また居士彭紹升の弟子でもある。自珍が江沅の教えを受けたのは、二十九歳の上京の途次のことと思われる。この年の秋の詩に「趙晋齋魏・顧千里広圻・鈕非石樹玉・吳南郷文徵・江鉄君沅、同じく虎丘に集い秋譙するの作」があり、また「癸未六月二日」(道光三年、自珍三十二歳)の日付けのある「江居士に与うるの箋」に「別離以来、各自苦辛す。……自珍の学、足下に見いしより堅く進む。……重ねて京師に到りて又三年……」と述べているからである。

仏教を本格的に学び始めてから、それに関わる詩が多く

なってきた。三十歳のときのそれらの詩をみてみよう。

結習真難尽 結習 真に尽し難し

観心屏見聞 観心 見聞を屏ざす

焼香僧出定 焼香 僧 定を出で

譚夢鬼論文 譚夢 鬼 文を論ず

幽緒不可食 幽緒 食<sup>じ</sup>なう可からず

新詩如乱雲 新詩 乱雲の如し

魯陽戈縱挽 魯陽 戈 縦まに挽けども

万慮亦紛紛 万慮 亦 紛紛たり

この詩は「観心」と題されているが、「観心」とは心中の妄念を抑えて、みずからの心を観察することであろう。さとりに至る基本的修行である。「結習」(煩惱)は尽し難く、見聞を閉して内観の法を行い、修行に入る。香を焚けばたちまち禅定は破れ、修行に入ればやかましい夢想の中で、心中の鬼どもが詩文を論ずる。深い思いを養ってはならぬと思うけれども、新詩は乱れる雲のごとく湧きあがる。ほこで夕日を招き返した楚の魯陽公のように、わたしもほこをふるって想念を断ち切ろうとするのだが、さまたまの想念が紛紛と乱れ起るのだ。この詩は、仏道修行に入っても詩人として詩作の欲求を断ち切れぬことをうたったものである。また「又儼心一首」は

仏言劫火遇皆銷 仏は言う 劫火に遇いて皆銷ゆと

何物千年怒若潮 何物か千年 怒 潮の若き

經濟文章磨白昼 經濟の文章 白昼に磨し

幽光狂慧復中宵 幽光 狂慧 復た中宵

来何洶湧須揮劍 来りて何ぞ洶湧す 須らく劍を揮うべし

去尚纏綿可付簫 去りて尚お纏綿たり 簫に付す可し

心藥心靈總心病 心藥心靈 総て心病

寓言決欲就燈燒 寓言 決して燈に就きて燒かんと欲す

仏はいう、劫火にあえばすべてが燒え尽きてしまふと。

しかしその劫火でさえ滅することができず、千年の間も心の中に怒潮のごとく湧き立つものは、いったい何であらうか。わたしはその「物」に衝き動かされて、經世済民の文章を白昼に練り、心中の奥深くに発する奇怪にして定まらぬ想念を抱いて眠れぬ夜を過す。その「物」が起るときは波立ち湧きかえるごとく、わたしは劍を振って行動せねばならぬ。しだいに収まりゆくときは、なお纏綿として心に残り、詩にうたうのだ。「心藥」(經世済民の文章)だろうと「心靈」(詩)であろうと、すべては心の病のなせるわざ。「寓言」(11)、わが意を託した詩文など心を決して灯火で燒いてしまおう。

自珍は煩悶の果てに言語による表現をすべて「心病」として否定する。その結果、変革を希求する詩人としての自珍は消滅し、残るのは信仰者としての沈黙のみである。自珍は詩人たることをやめ、信仰に安心立命の境地を求めようとする。その決意を「詩を戒しむるに当に詩有るべし、偈の如く亦偈の如し」(「戒語五章」その一)とうたったのが「戒詩五章」であり、この年二十九歳の秋以降、作詩を断つのである。

「己亥雜詩」を除く編年詩では、この二十九歳の年には秋までに現存四十数首の詩があり、三十六歳のときの現存六十首に及ぶ多作の時期に次ぐ。このことは心中の憂悶の深かったことを推測させるものである。しかし詩を作ることは、自珍にとって、憂愁を吐露して心を慰めるものではなく、憂愁をさらに深めるものでしかない。憂愁を断つためには詩作を断たねばならない。「戒詩五章」その二にいう

百臟發酸淚 百臟 酸淚発し

夜湧如原泉 夜湧くこと原泉の如し

此淚何所從 此の淚 何の從る所ぞ

萬一詩祟焉 萬一 詩 祟たたずるか

今誓空爾心 今誓って爾の心を空にせん

心滅淚亦滅 心滅せば淚も亦滅せん

有未滅者存 未だ滅せざる者の存する有るも

何用更留迹 何ぞ更に迹を留むるを用いん

あらゆる臟腑から辛酸の涙が流れ出て、夜ごと泉のごとく湧き出すのだ。この涙はいつたどこから来るのか。ひよっとすると詩の祟でもあるか。いま、お前の心を空虚にしようと誓う、心が消滅すれば、涙も消滅するだろうから。それでもなお、心の中に消滅しないものがあるとしても、どうしてそれを詩に書き留めることをしようか。

詩人である限り酸涙を流さねばならぬ。とすれば、悟境に達せずなお心中に想念が残存するとしても、それを詩には書けない。もし詩を作れば再び酸涙を流すことになる。憂愁を消すためには、詩人たることをやめねばならぬ。自珍にとって、詩は憂愁をうたつて慰めを得るものでなくして、かえって憂愁を生み出すものでしかないのである。

「戒詩五章」その五にも、再び表現の世界に立ちもどらぬことを堅く誓っている。

我有第一諦 我に第一諦有り

不落文字中 文字の中に落ちざること

一以落辺際 一たび以て辺際に落つれば

世法還具通 世法 還た具通せん

横看与側看 横に看ると側に看ると

八万四千好 八万四千好

泰山一塵多 泰山に一塵多し

幹海一蛤少 幹海に一蛤少く

随意撮拳之 随意に之を撮拳すれば

龔子不在斯 龔子 斯に在らざらん

百年守尸羅 百年 尸羅を守れば

十色毋陸離 十色 陸離たる毋からん

わたしには「第一諦」唯一の真理がある。文字の世界に再び落ちないことがそれだ。ひとたびその中に落ちれば、世俗の道理がまた支配することになる。横よりみても斜よりみても、阿弥陀仏は、八万四千のうるわしいお姿を持ち、一切衆生を救済されようとしている。泰山に一片の塵を増しても変らぬように、瀚海から一個の蛤を減らしても瀚海は変らぬように、わたしはそんな塵や蛤のような微小な存在だから、阿弥陀仏が衆生を救済されようとして、意のままにつまみあげたなら、龔子はその中に入らぬであろう。しかしそうであっても、長く「尸羅」を守れば、「十色」は光彩陸離たるものではなくなるであらう。「尸羅」は、梵語シーラ、戒のこと。この詩では戒詩を仏道修行の戒律と同じものとしていう。「戒詩五章」その四にも「我今詩を為ることを戒む、戒律 亦た之の如し」といって

る。「十色」は、五根（眼・耳・鼻・舌・身）と五境（五根を通じて認識される感覚の領域）のことであるが、この詩では仏教哲学における厳密な意味によって用いられているのではなく、認識作用や表象作用などの心の作用を漠然といつているのではないか。とすれば、「十色 陸離たる母からん」は、戒詩を堅く守るとき、やがて想像力の光彩陸離たる飛翔はやみ、心は安らぎ、憂愁から解き放たれるということになるであろう。

憂愁を断ち切り仏道による救いを求めるために、戒詩は戒律のごとく堅固に守らねばならぬ。かくて自珍は、詩人としてきわめて特異な戒詩に入るのである。（未完）

#### 〔注〕

（1）「懷人館詞序」の制作時は嘉慶十七年である。時に自珍二十一歳。

（2）「与外孫襲自珍札」

（3）「明良論」に次のように付記されている。「外祖金壇段公評して曰く、四論皆古方なり、而れども今の病の中、豈に必ずしも別に一新方を製せんや。髦いて、猶お此の才を見て死す、吾恨みず。甲戌秋日。」「四論、乃弱歳の作る所、文氣も亦何ぞ能く清晏たらん。故箴中に棄置すること久し。檢視するに第二篇後に外王父段先生の墨を加えて矜寵するを見る、泫然として之を存す。自ら記す。」

（4）「三國志・魏志・裴秀伝」注引「魏略」に「（嚴）幹……特に春秋公羊を善くす、司隸鍾繇 公羊を好まずして左氏を好み、左氏を謂いて太官と為し、而して公羊を謂いて売餅家と為す、故に数しは幹と共に長短を弁析す。」とある。

（5）「己亥雜詩」その五十八に「年十有二、外王父金壇の段先生授くるに許氏の部目を以てす、是れ平生 経を以て字を説き、字を以て経を説く始なり。」とある。

（6）陶然亭は、北京外城先農壇の西側、陶然亭人民公園内にある。

（7）田中謙二「襲自珍」（岩波詩人選集）の注には「本無句作者がいわんとすることを、一一の文字自体にはしめさず、全体として、あるいはふんい気において感じ知らせる作詩の態度が、わたしの範とするところだの意。唐の司空図の『二十四詩品』含蓄の項にいう、『二字を著せずして、尽く風流を得』……」という。また別の解釈もあげて「しかし『本と一字無しが禪の境地のごときを意味すれば、ここでも戒詩（作詩を断つ）を宣言したことになる。』といい、さらに「一字は吾師」を「一字の師」（一字の添削によってすぐれた詩にする先生）と解して「したがって、この句は『本と一字の是れ吾が師なる無し』（一字だつて先人の作品には範をもとめない）とよむ可能性もないではない。』とする。郭延礼「襲自珍詩選」（齊魯書社 一九八一年）には『洗尽』二句、洗掉我的『狂名』、費尽心思考慮斟酌、本来也無有一個字可以改動。洗、洗刷、此可引申『為受誣而弁』意。」「一字は吾師、即是吾一字師。一字師、改正一個字

的老師。相伝鄭谷改僧齊己的『早梅詩』、將詩的「数枝開」改為『一枝開』、齊己贊服下拜、称谷為「一字師」（見『唐詩紀事』）と注して「一字師」の「解をとる。「人生識字憂患始」をふまえるものは他に、「己亥雜詩」その六十二「古人製字鬼夜泣、後人識字百憂集」がある。なおこの詩第二句の「清深」は田中謙二「龔自珍」には「清らかで深刻な表現。清奇深遠。」と語釈が与えられているが、表現についていふものかどうか、明確にいえぬように思う。

(8) 「想」を「想念」と訳しておいたが、仏教でいう「想」、心作用の全てを包括する語「五蘊（色・受・想・行・識）の「想」（表象作用）をさしているものか。

(9) 嘉慶二十五年庚辰、二十九歳のときの南行を示す主な編年詩に次のものがある。「全集」の編次のままに挙げる。「発洞庭、舟中懷鈕非石樹玉・葉青原和」「此遊」「過揚州」「趙晉翁貌……江鉄君沅、同集虎邱秋燕作」「題虎跑寺」「杭州竜井寺」「逆旅題壁、次周伯恬原韻」「広陵舟中為伯恬書扇」「吳市得題名録一冊……」など。また翌年の上京については吳昌綏「定龔先生年譜」に「道光元年辛巳、三十歳。正月、吳中に在りて顧澗齋（千里）と探梅の游を作す（上年の秋冬の間に南に旋えるに似たり、疑わしきを闕きて考を俟つ）。旋えりて都に入る。」とある。

(10) 「己亥雜詩」その百四十一「鉄師講經門徑仄、鉄師念仏頗得力」の自注に「江鉄君沅は是れ予が仏を学びし第一の導師なり。」という。

(11) 「幽光」は、「観音経玄義」に「若慧而無定者、此慧名狂慧

譬如风中燃燈、揺颺揺颺、照物不了。」とある。「剣」と「簫」は、自珍の詩文に常に並立して現われる語で、「剣」は経世済民の志を暗示し、「簫」は詩詞にうたうべき憂国の哀情を暗示する。例えば「怨去吹簫、狂來説劍」（「湘月」）、「沈思十五年中事、才也縱橫、淚也縱橫、双負簫心与劍名」（「醜奴兒令」）、「一簫一劍平生意、負尽狂名十五年」（「漫感」）、「氣寒西北何人劍、声滿東南幾処簫」（「秋心三首」その二）、「接劍因誰怒、尋簫思不堪」（「紀夢七首」その五）、「少年擊劍更吹簫、劍氣簫心一例消」（「己亥雜詩」その九十六）などである。「心藥心靈」はわかりにくいことばだが、「心藥」は、心中に考えた国を救うすぐれた方策、すなわち経世済民の文章、「心靈」は憂国の哀傷をうたった詩と解した。「心葉」は白居易「病中五絶句」その四に「身作医王心是藥、不劳和扁到門前」とあり、「心靈」は「隋書、経籍志」に「詩者可以導達心靈、歌詠情志者也」とある。

(12) 「十色」は、「俱舍論」にみえる語。「色」は、心作用の全てを段階的に包括している「五蘊」（色・受・想・行・識）のひとつ。「色」は、五根（五官）と五境（五官によって認識される色声香味触）で、「十色」とは、それを合せて数えた語である。